

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「物質・光・理論分子科学フロンティア」 元素の特性に基づいた分子機能に関する日中シンポジウム報告

報告：生命・錯体分子科学研究領域 教授 魚住泰広



触媒反応開発、新規な機能性分子開発が中心となっており、必然的に中国側からもそれに呼応するように関連研究発表が主流であった。また今回特筆すべき点としては前日（9日）に開催されていた日中有機金属化学会議の参加者（日本、中国）が自費で滞在を延長して本シンポジウムにも参加してくれたことであり、日本からは重鎮である細見彰筑波大学名誉教授を筆頭に十数名の研究者が、また中国側としては席教授（北京大、分子研・総研大出身）を筆頭とする20名以上の大学関係者がディスカッションに参加し、それにより本シンポジウムが一層の緊張感をもって盛り上がった。北京ダック、白酒（55度ほどの強い中国スピリッツ）、烏龍茶（それなりの「茶道」とも言うべき作法があり、大変美味しく興味深い。いわゆる日本のペットボトルの烏龍茶とは全然別である）などなど会場外のアクティビティーも銘々各々盛り上がったようである。オリンピック効果で町並みも整備されたところが多く、空港もだいぶ整備され、ついでに福原愛の人気にも驚かされた北京であった。

懇親の席上では次年度以降上海（有機化学研究所）での同様のシンポジウム開催を希望する声も多く聞かれた。ぜひ前向きに次回への継続を考えたい、成果に富むシンポジウムであった。

10月10日、11日の両日、北京大学において「China-Japan Joint Symposium on Functional Materials toward Future Catalysts (元素の特性に基づいた分子機能に関する日中シンポジウム)」と題するシンポジウムを開催した。燃油の高騰で当初予定を完遂するには厳しい財政状況のなか、今回は日本側の世話人として魚住（分子研）に加えて京都大学の杉野目道紀教授にご尽力いただき、中国側はWang、Jianbo（北京大）、Fan Qinhuo（科学研究所）両教授をホストとしての開催である。すでに関連のシンポジウムも3回目（年1回、3年目）を迎え、行く日本側も迎える中国側も互いに知己も増え、準備・運営に

も手慣れた感さえある。シンポジウム内容としては、日中両国の口頭研究発表が半数ずつを占め、相互のインタラクティブな学術交流が持たれた。日本側は主催機関である分子科学研究所に限定せず北海道大学、京都大学、鳥取大学、大阪大学、九州大学、東京大学からも登壇、ポスター発表を得、中国側も北京大学、精華大学、化学研究所をはじめとし、本領域の気鋭の研究者が登壇した。日本からの発表参加者13名。そのうち前回から始めた大学院生・ポスドクによる発表（今回は残念ながらポスター発表となった）が4演題。中国側からはかなりの数のポスター発表があった。日本側からの話題（演題）の多くは遷移金属を利用した錯体合成、

02

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「物質・光・理論分子科学フロンティア」
元素の特性に基づいた分子機能に関する韓日シンポジウム報告

報告：生命・錯体分子科学研究領域 教授 魚住泰広

11月2日、3日の両日、韓国大田(Daejeon)のKorea Advanced Institute of Science and Technology (KAIST)において「Korea-Japan Joint Symposium on Functional Materials toward Future Catalysts: Chemistry Showcase (元素の特性に基づいた分子機能に関する韓日シンポジウム：化学ショーケース)」と題するシンポジウムを開催した。今回は日本側の世話人として魚住(分子研)に加えて大阪府立大学の柳日馨教授にご尽力いただき、韓国側はSukbok Chang、Hee Yoon Lee、Sanggak Kimの3教授を中心とした実行委員会をホストとしての開催である。すでに中国において関連の触媒的有機合成化学系シンポジウムが成功を収めつつあり、今回は韓国における最初のショーケースとなった。シンポジウム内容としては、日韓両国の口頭研究発表が半数ずつを占め、相互のインタラクティブな学術交流が持たれた。日本側は主催機関である分子科学研究所に加え大阪府立大学、京都大学、関西学院大学、名古屋大学、慶応大学、大阪大学からも登壇を得、韓国側もKAIST、Sungkyunkwan大学、Ewha 女子大学、などから多くの参加者を得た。日本からの発表参加者12名。そのうち大



学院生・ポスドクによる発表が3演題。英語による口頭プレゼンテーションのデビュー戦となった大学院生は発表のみならず積極的に質問も発し、また日本に韓国から留学中の大学院生、ポスドクの凱旋講演(?)も内容あるものであった。

さて、夕食の席では携帯電話による記念撮影をレストラン従業員に依頼しようとした某京大教授が完全にカタカナ日本語で「カメラモード、カメラモード」と連呼し、その単語が通じていないことを懸念した某慶大教授が「Oh! It's "mecha" Japanese (めっちゃジャパニーズ)」と怪しい英語で止めに

入り、わけの分からない状況となるなど、大変和気あいあいとしたホスピタリティーに包まれた懇親となった。日本語会話(日本人-日本人)韓国語会話(韓国人-韓国人)英語会話(日本人-韓国人)が飛び交うのを日本留学中の韓国人院生、PDだけが全てを理解するという複雑な場面も飛び出したり、カラオケで踊りまくってネクタイピンを落とし翌日届けられたり、硬軟(学術、友好)両面で心からの交流を持つことができたと自負している。Asia-Coreプログラムのサポートを得て、ますますの交流を祈念して止まない。